

基調講演「届きにくい本の届け方 2021」

講師：有限会社BACH代表 ブックディレクター 幅 允孝 氏

1. はじめに

最近は公共図書館を作る仕事が多いが、選書、配架、サイン計画、家具計画、アートディレクションなど、本を1冊手に取ってもらえる工夫をあらゆる側面から考えることを仕事にしている。

もともとは本屋に勤めていて、人の本離れが進んでいるのを書店の現場で感じていたことが今に至る来歴の初期衝動である。Amazonの日本法人ができた時には、そこで多くの人が本を買って、書店に来なくなるとは想像だにできなかった。売り上げが減るのも残念だったが、来店客数が減っていったのが一番残念だった。本というのは、著者以外の誰かが読んで始めて本たりうと思っている。数分の立ち読みでも、誰かの目にさらされることによって、その本が熱を帯びるということがある。来店客数が減ると、本屋に蓄積していく熱もどんどん減ってしまう。熱が減ることによって、本屋が冷たい場所になってしまうと感じた。

そこで、人が本屋に来ないのであれば人がいる場所に本を持っていこうと考えるに至り、今の仕事に続いている。これだけ時間の奪い合いが激しい世の中で、本というある程度没入に時を要するものにどうやって立ち止まり、興味を持ち、手に取ってもらい、読んでもらうのかをいつも考えている。

図書館という観点からいうと、以前は「無料で本が借りられる場所」だったかもしれないが、全世界的な動きとしても図書館はこれから教育とコミュニティの場所として大切な場所になっていく。收藏されている本を大事に扱うという一方で、図書館の前を通り過ぎてしまう人の肩をたたいて、「こんな面白い本ありますよ」と本を差し出すという、本の投げかけをやっていくことも重要な果たすべき役割と思っている。先人が守ってきたアーカイブスを守り続けるということと、目の前を通り過ぎていく新しい読者になるかもしれない人たちへの投げかけ、守る部分と投げかける部分の両輪をしっかりと走らせることがこれからの図書館に求められることなのではないだろうか。



2. 届きにくい本の届け方

■〈初期衝動としては〉自分の好きな本を共有したいと願うこと。

自分が届けたいものを何とか誰かに届けたい、何とか誰かに届くものにしたい。残念ながら本に限らず、なかなか「好き」が伝わりにくく、親切で言っているつもりが相手にはおせっかいにしか受け取られないことがたくさんある。承認不足の世の中で、自分の好きなものを自分以外の人もいいねと言ってくれると嬉しい。「好き」を届けるための技術、メソッドを考えてみてはどうか。

■伝えたい本がなかなか伝わらない。埋もれてしまってなかなか出会えない一冊。

本のタイトル数が増えているのに、反比例して本の売り上げは落ちている。ただ、2020年に何で本が売れたのか。コロナ禍において、本というものが今までとは違う立ち位置を獲得したので

はないだろうか。ウイルスやコロナについて何が真実で、何がそうではないかが判別がつきにくくなっていて、自分で自発的に調べるという視点が大事になっている。本は著者名がはっきりしている。責任の所在がはっきりしていて、引用もエビデンスが明確だ。そういう本を何冊か自分なりに選んで読み重ねることによって、自分の意見を自分で作ることに近づくことができる。

コロナ禍のステイホームで、映像のチャンネルを見た方も多かったと思う。コンテンツが豊かで延々と再生できる。終わりがないところが映像の面白さでもあるし、怖さでもある。終わりが無いから止めようがない。ずっと見続けていると、コンテンツに接している時間を自分で牛耳ることができなくなってくるのが、問題として一番大きいと思う。

読書というものは、読んでいて気になる部分に立ち止まれる。留まって考え、別の本にあたることもできる。読み戻すこともできる。つまり、コンテンツに対して接している時間を自分で牛耳ることができる。時間を自分でコントロールできるところが、本のメディアとしての特殊な部分なのではないか。それがコロナ禍において本が、読書という時間も含めて、見直された部分なのではないかと思う。

1日200タイトル弱が出版され、どの本を手にとっていいかわからない状況から、人と本にもう一度よい出会いをもたらしたい。人が本屋（図書館）に足を運ばないのならば、本が人のいる場所へ行くべきではないか。

■BACHの仕事

人と本の関係・距離が離れている中で、それを近づけるような仕事をしたいと思っている。検索型の世の中なので、人は知っている本しか手に取らない。知らない本を偶然手に取るような機会を、いろいろな場所に点在させたいと思いながら仕事をしている。

本の読み方については、「好きに読んでください」と考えている。それぞれの人が自分の読み方でその本を読めるようなニュートラルな状況を整える、環境を整えることが重要。読むまでの状況、モチベーションや環境（場所）も含めて、それをどういう風につくっていくのかをいつも考えている。

家具計画やサイン計画を考える際も、本が届きにくい状況下で、それを手に取ってもいいなと思える状況、気がつけば読んでいたという状態を作りたいと思っている。こちらの思いや作為を越えて、「気持ちがいいから読んでいました」という状態をどう作るかを考えながら仕事をしている。

■届けたい相手が両手を伸ばして届く範囲内に本を配置しなければ。

自分の好きなものが他者に伝わりにくい世の中で、どうやってその溝を埋めていくのか。好きな本をただ勧めても、おせっかいにしかならない。選書をする際にはインタビューワークを行い、話を聞くことをとても大事にしている。

インタビューワークは、多種多様な本を持って行って、実際の本を触ってもらいながら、それぞれの本への感触を探っていく作業である。例えば病院図書館等では、重さや文字のサイズなどもとても重要なので、リアルな本に接してもらいながらインタビューワークを敢行して、届けたい相手が内側に持っているものと外側にあるものをどう近づけるのか、距離を縮めるかをいつも考えている。

【小学生に本を勧める】

大好きな作品である『宝島』¹をプレゼンテーションするが、全く響かない。小学生が“両手を伸ばした範囲”の内側に『宝島』はない。彼らの話を聞きながら、同じ海賊物の冒険譚で小学生にも人気のコミック『ONE PIECE』²との共通項をあげていくと、さっきまで彼らの両手の外側にあった『宝島』を近くに感じてもらえ、興味を示してくれる。

ものも情報も多い世界なので、自分の両手を伸ばした範囲の外側にあるものをどんどん後ろに流していかないと前に進んでいる実感が抱きにくい。だから自分に関係のないものは通り過ぎてしまう。関係のないものに、どうやって関係を持たせるか。そのためには、自分の内側にあるものと外側にあるもの、関係を持たせたいもの同士の結び目＝結節点をどういうふうに作らせるのかというのが重要である。

■結節点をつくる。そのために、磁場や人の流れに従う。

結び目をたくさん作りながら、読者にとって関係がないと思っていたものを、どれだけ関係があると思わせるかが本棚をつくる時には大事だ。本棚をメディアとしてとらえるなら、いろいろな方法で本の差し出し方は考えられる。

目の前を通り過ぎていく人に本を投げかけるという側面を考えたときに、NDC を越える分類の再編集をする必要があるのではないか。その場所に特化した分類が、NDC と同じくらい効果があると思う。

【編集型の本棚とは？：トヨタ博物館 ミュージアムカフェ「CARS & BOOKS」】

高級車ロールスロイスの製造工場で働く人に密着した写真集『Rolls-Royce Motor Cars』³の隣に並べたのは、漫画『ちびまる子ちゃんーわたしの好きな歌』⁴。主人公がロールスロイスに乗る場面があり、そのページに車のかたちの付箋をはさむことで、一般的に車への親和性が低い女の子や母親たちも手に取りやすい。組み合わせの妙によって、写真家の作品と日本の国民的漫画のキャラクターがつながる。

いつもの NDC では隣り合うことはない本が隣同士に並ぶ、既視感のない本があることで、良い意味で落差、ポジティブなつまずきが見いだされる。ポジティブなつまずきをうまく生かして、本を手にとってもらう。そして、その本を手にとってもらいたいという動線を設計したのなら、手に取った瞬間に最初に開いてほしいページがわかるように、付箋などもつけて本を差し出していくことで、普段だったらなかなか手に取らないような1冊に興味を持ってもらえるかもしれない。

今まで関係がなさそうだったものに関係をつくる＝結び目をつくることによって、未知の本に偶然出くわすような可能性を高めることができるのではないだろうか。

3. 選書のケーススタディ

(1) 神戸市立神戸アイセンター (2017)

視覚障害のある方にどんな本が必要なのか、何十冊もの本を持って行って働く人や通っている患者さん達に半年くらいかけてインタビューを行い、選書を進めた。全盲の方と弱視の方では、必要な本が全く違うとわかり、インタビューも完全に分けて行った。

【全盲の方へ】

- ・音声図書：機械音声よりは生の声で録音されたものが好まれる。
- ・点字図書：音声図書だけでは点字ができなくなり、昔の本にあたれない。

◎香料インク印刷の絵本『おともだちカレー』⁵

普段は耳で物語を解釈している子どもたちに、それ以外の器官を刺激することで本を伝える。

◎選書のキープック『でんしゃは うたう』⁶

視覚障害のある作者に聞こえている音が、細やかに音節に分け言葉に落とし込まれている。音に対して親和性の高い本の選書、音のとらえ方を考えるキープックとなった。

【弱視の方へ】

- ・文字よりは、ビジュアルがよい。ハイコントラストなカラー写真が好まれる。
- ・何が見えるかより、何を見たいのかを追求した選書を行う。

◎記憶の中に残っているものを見いだす

篠山紀信『アイドル 1970-2000』⁷ 若いころに夢中になったアイドルたちの写真は“見える”。

その他には、阪神タイガースや甲子園、震災前の神戸の風景などが求められた。

選書にあたっては、自分たちが好きなものをただただお勧めするというより、勧めたいものがあるべきものの距離を縮めていき、距離を縮めながら結び目をつくっていくというのが、本の差し出し手として重要な立ち位置、やり方なのではないか。

(2) こども本の森 中之島 (2020)

建築設計を行った安藤忠雄氏の意図を読み解いて場所をつくっていく。12の選書テーマを設定し、NDCをベースにしながらも、いろんなジャンルを網羅しながら独自の編集、分類をつくった。

入口入ってすぐのところを「自然とあそぼう」とか「体を動かす」というテーマにしたのは、内と外の境界をなるべくあいまいにしたかったからだ。図書館に入ったとたんに背筋を伸ばして静かにしなくてはいけないというよりは、外からの延長というかたちで空間を感じてもらいたかった。出入口の境界をあいまいにすることで、外の環境が自然に内側にも続いているように思える。

普段本はあまり読まない、好きではないと思っている、遠くにいと自分で思い込んでしまっている子どもたちも取り込みたい。1階出入口の近くはなるべく動的な本で、深い場所に行けば行くほど「将来について考える」とか「生きること／死ぬこと」といった子どもにとって一番遠いと思われる死も考えるといった配架動線も、建築のあり方とどうやって呼応させるのかを考えながら作った。

■サイン計画を新しい目線で。

サイン計画もとても重要で、いろいろな工夫を凝らした。

図書館が収蔵の冊数で評価が上下するということがあるが、どれだけ収蔵の冊数を増やしても、オンライン上のデジタルライブラリーには数ではかなわない。たくさんあることよりは、1冊が確実に届く、その子供の中に刺さって抜けなくなる状態をつくることの方が大事ではないか。

本を1冊手に取って、中を開いて、読むという3つのハードルがある。目の前を通り過ぎる人に本の中の一部が認知されるような状態を作るため、アフォーリズムを抽出し、言葉の彫刻で表現した。引用のサインがあって実際にその本があるという状態を作った上でのアフォーリズムで、本への促しを新たにつくる意味で効果的だと思う。

特徴のある建築の図書館が全国に増えているが、建築と対話をしながら配架をしているかを問い続けたいいけない。建築家の意図を最大限吸収しながら、一方で本の差し出し手としてどう解釈して、どう配架に生かすのか。

【円形の部屋・書架】

生から死、そしてまた生へという輪廻のように一周回るイメージから、テーマ「生きること／死ぬこと」の配架場所とした。大阪市の元のプランでは、各国大使館からの寄贈本を並べる予定であったが、選書テーマを鑑みて、場所にふさわしい本の内容を検討した。

映像の影響力が強い中で、動く映像を使って本に対する訴求もしたいと考えた。映像を見て本を読んだ気になるのは楽だが、自分で書き手と対峙して、読み手として向かい合うことが重要だと思うので、あくまでも読んだ気になるではなく読みたくなる、それを促す工夫をどうするかが重要だった。シアターにはせず、本への促しの機能を果たすときもあるし、何もない時もある。映像が一過性で終わらないように刷新できる仕組み作り、アップデートできるプログラムの構造、予算の組み方が大切である。

■入場料がない図書館という場所で、少しでも「独立自尊」を保つために…。

ニューヨーク公共図書館は、世界中からの寄付や協賛によって成り立っている。商業というものに後ろ向きではなく、自分たちが自分たちらしさを保つために必要なことだと決意してやっている。

こども本の森 中之島では、アートディレクターやマーチャンダイザーを入れて、SKU (stock keeping unit) を見ながら在庫を管理してグッズを作っている。名前をわかりやすく伝えるためにアイコンを作って視覚化し、絵を見たときに場所が思い浮かぶようにした。コミュニケーションとして、文字を使わずに伝えることは重要で、新しい場所を認知してもらうのに、アイコンをつくったりデザインを整えたりすることを考えた。

■こども本の森が出来るまでのプロセス

分類では、大テーマの中に中テーマ、小テーマを細やかに作っていくことを大事にした。抽象的過ぎても届かないと考え、テーマを細分化し、インデックスで分類した棚づくりを行った。

■選書の隠れたテーマ

選書で常に頭の片隅におくのは、「子どもを子ども扱いしない」ということだ。純粹に真っ白な状態で物を見られる時期、その短い時期にいろんなものを見せてあげる必要がある。柔らかくて無垢な感受性に対して、大人として彼らを子ども扱いせず、なめずに提案することができるのではないか。

【子どものものの見方】

- ・『Jazz』⁸ 鮮烈な色の連なりへの純粋な反応としての“落書き”
- ・『円谷プロ全怪獣図鑑』⁹ 掲載された何千もの怪獣を全て覚えてしまう保育園児の登場
- ・『STORY TELLER』¹⁰ 着飾ることが大好きな女の子は、世界を代表するファッション写真家の作品集に載ったトップメゾンのドレスを見て、素直に「これ着てお嫁さんになる！」

本がどんどん売れなくなっているが、絵本のマーケットはちょっとずつ増えている。コンテンツが豊かで、絵本を子どもに読んでほしいと願うお父さんお母さんが多い。

しかし、絵本は売れるのに児童文学にジャンプしない。読み聞かせが世の中にたくさんある一方で、読み聞かせすぎてしまうと、映像を見続けるのと一緒に、子供たちは「待っていれば物語は向こうから勝手にやってくる」ものだと思ってしまうのではないか。物語は自分で読み始めて自分でつかむことが重要だ。絵本と児童文学の懸け橋になる存在として、幼年童話が挙げられる。

【幼年童話：『スパゲッティがたべたいよう』¹¹】

「スパゲッティ」というカタカナに、「すぱげってい」とひらがなでルビがふってある。ひらがなを覚えた子どもが、自分で最初に読める本。

読むという行為は、聞くということより能動的なので難しい。映像の方が勝手に動いてくれて楽だが、たどたどしくも頑張って読み進めていくと、自分の頭の中のビジョンが広がる瞬間がある。それを小さな頃に体験するかしないかで、テキストを読むときの耐性や持久力が変わる。自分で読むという習慣、読むという行為をやり続けるには筋力が必要で、最初の一步目を大事にしようという時に幼年童話はとても可能性があると思う。

(3) こども本の森 遠野 (2021)

こども本の森 中之島と同じく、本を魅力あるものとして手に取ってもらうというコンセプトで作られている子どもの図書施設だが、場所が違い、建物が違っていると、当然本の差し出し方も変わってくる。蔵書 13,000 冊を約 800 の小分類にまで分類し、遠野に通って話をし、現地での経験値を蓄積しながら棚づくりを行った。

柳田国男の『遠野物語』¹²を起点として棚づくりを始めた。現在の子どもたちに通じる棚づくりをどうするかという時に、妖怪、鬼…と棚のグラデーションを広げていった。鬼の棚には『鬼滅の刃』¹³を置き、柳田の呪いや禁忌に関する作品の横には『呪術廻戦』¹⁴を並べた。新刊購入予算がなく、ほとんどが寄贈である。寄贈の本の中に、遠野の子どもたちが好きというものをうまく滑り込ませていった。

自分たちの地元を代表する『遠野物語』を書いた柳田という民俗学者が、呪いについて書いていたことを知ってもらうという子ども向けの動線は、ひょっとしたら大人にも響くかもしれない。新刊購入が少ないゆえに、どれだけ効果的なスパイスを刺していけるのかを考えながら棚づくりをした。

(4) 札幌市図書・情報館 (2018)

「こういう人来てもらいたい」という思いを明文化して掲げることは、図書館のキャラクターを作っていく上で重要だ。アイコンと同じで、自分たちのキャラクターを意識するという意味

で、「はたらく人のためのライブラリー」というコンセプトを明確化したというのはよかった。場所、開館時間、座席の予約など、働く人の生活リズムに寄り添った運営体制を構築できたのも大きかった。

独自分類を行う上では、「はたらくをらくにする。」というメインコンセプトに依拠しながらテーマを作っている。大テーマ、中テーマ…という棚の構成は、置かれている状況や疑問に対して、探している本に素直にいざなわれるよう気を付けた。テーマ分類の仕方と投げかけ、それを運用して集まってくる声を生かしながらどうやって棚づくりを進めていくのが実践でき、立ち上げ時に枠組みを提示したが、現場の運用の中で生かされてアップグレードしている。棚の編集をする司書の個々のユニークさ、力量や思うことの良い意味での偏りが、棚の魅力をつくることを示してくれている。



4. 紙束をひらくという行為をカラダが忘れないこと。

気がつけば読んでいたという状態をどう作るか。図書館の例で言えば、最近では床材について研究をしている。タイルの硬さ、カーペットの毛足の長さ、椅子の高さ、座面のマテリアル、本を置く台があるかないか…で、本が手に取られる可能性が変わる。人の認知や、無理なく動ける行為を考える実験だ。

図書館司書は、本を守り継いでいくという使命と、目の前を通り過ぎていく人たちに本を投げかけていくという果たすべき2つの大きな使命を担っている。本を伝えていくのに、空間や身体が大事だと思っている。良い本を選んで丁寧に差し出すということをすれば届くと思っているかもしれないが、それを床材のことまで考えているか、サインのことまで考えているか、椅子の高さや座面のことまで考えているかという、果たしてどこまで考えているだろうか。

司書・ライブラリアンという仕事の領分は、これからの世の中の図書館のあり方を考えるときに、読む環境も一緒に考えていく必要がある。どういう本がそこに配架されるのかによって、床材はこれでよいのか、椅子をただ置くだけではなくて、どんな素材でどんな角度だったら気持ちが良いだろうかということまで考える。それが「差し出し方の工夫」であって、なかなか届きにくかったものが届く可能性が高まるのではないかと。本を読んでほしいときに、「読め、読め」ではなくて、気がつけば読んでいたという状態をつくるためには、本を読むあらゆる周辺環境を考えることが重要だ。

コロナ禍で本を読むという行為をもう一度思い出した人が多かった。本を借りて帰って家で読むのが図書館における読書スタイルの大前提かもしれないが、公共図書館のある場所が気持ちよい、落ち着く、あそこだったら読めるとか、個々にとって読むのに心地よい場所に変容していくことも重要なのではないかと。「読書のジム化」と言っているが、時間の確保とモチベーションの喚起を行い、図書館に行ったらスイッチを入れて読むぞという気分になってもらう工夫を重ねるなど、本を読む環境を整えることも、これからライブラリアンが考えていかなければいけないことになるのではないだろうか。

本を届けるということはとても難しいことだが、一方で可能性のある楽しいこと。本というメ

基調講演

ディア自体が果たせることが世の中には絶対にあると信じている。そういう目線で、毎日対峙している現場を見てほしい。

紹介された本

- 1 『宝島』 R.L. スティーブソン／作 寺島龍一／画 坂井晴彦／訳 福音館書店 2002
- 2 『ONE PIECE』 尾田栄一郎／著 集英社 1997～
- 3 『Rolls-Royce Motor Cars』 Koto Bolofo／著 Steidl 2014
- 4 『ちびまる子ちゃんーわたしの好きな歌』 さくらももこ／著 集英社 1993
- 5 『おともだちカレー』 きむらゆういち／作 江川智穂／絵 世界文化社 2012
- 6 『でんしゃは うたう』 三宮麻由子／文 みねおみつ／絵 福音館書店 2009
- 7 『アイドル 1970-2000』 篠山紀信／著 河出書房新社 2000
- 8 『Jazz』 Henri Matisse／著 1947 初版
- 9 『円谷プロ全怪獣図鑑』 円谷プロダクション／監修 小学館 2013
- 10 『STORY TELLER』 Tim Walker／著 Thames & Hudson Ltd 2012
- 11 『スパゲッティがたべたいよう』 角野栄子／作 佐々木洋子／絵 ポプラ社 1979
- 12 『新版 遠野物語』 柳田国男／著 角川書店 2004
- 13 『鬼滅の刃』 吾峠呼世晴／著 集英社 2016～
- 14 『呪術廻戦』 芥見下々／著 集英社 2018～